

丸山久恵さん 100年インタビュー ③



～100歳のお誕生日を心から祝して～

●23歳結婚

・父親が嫁入りを決めてきてね、「行くのはいやだ！」と言ったら梨の剪定をしていた父親が怒って切った梨の枝を投げたら下にいた鶏に当たって鶏が死んじゃってねえ。母が悲しがって「お父さんが怒って鶏も死んでしまうから、あなた嫁に行ってくれ」と泣いて頼まれたんですよ。

義理の兄さん（姉の夫）が籠に着物から何からつめたのを背負ってくれて、2駅電車に乗って山を登って嫁入り先に行っって。初めて行く家だったねえ。

その日は悲しくておふとんを隣の部屋に引きずってそこで寝てねえ。翌日夫の父さんに「二人でお参りに行きなさい」と神社に結婚の報告に行かされた。そこで私も観念して言う通りにしなきゃいけないと思って。悲しくてねえ…昔はそんなことは普通でね、妹たちもみんなそんな風にしてお嫁に行ったもんだ。

・夫は丸山富（とみ）。6歳年上だった。東京のふとんやに就職してた。おとなしくて無口でね、自分からは一切喋らない人でねえ。働き者で夫婦喧嘩なんか全然したことない。実家からも婿の中で一番いいぞと言われてたよ。

・新婚早々夫は出征して「ポナペ」っていう島に行っって、穴を掘っって中にもぐっっているうちに終戦を迎えたみたい。

・夫が出征して一人でいても仕方なからうと母が私を迎えに来て、2年ほど実家にいてねえ。終戦後、飯田の町の映画館に両親と行ったら町が全部米軍に占領されて、米兵達に銃を突きつけられて映画を観るところじゃなかった。私は怖いもの見たさでアメリカの兵隊さんを見ようと頭を上げると、父親が「こら撃たれるぞ」と頭を押さえてねえ、怖かったですよ。

●焼野原の東京での新生活

・東京に出てきて、その当時は焼け野原で建物は何もなかったです。藁の家に、掘立小屋にいました。アメリカ兵がチョコレートや飴をくれるっていうんで、並ばにゃあって並んでもらったけど情けなかったですよ、日本人は。

・夫は中目黒の「まいこ綿」というふとんやで、ふとんの綿入れをして小田急のホテルに届ける仕事をしてたねえ。その後隣りに住んでいた大工さんに家を建ててもらって。

・私は店主のお嫁さんが体が弱かったもんでその両親の身のまわりの世話をしながら、ホテルの寝巻を50枚ずつ3日で縫い上げてたよ。

（聞き書き／長谷川洋子・西崎麻子）